

アフリカ南部の大自然を楽しんだ旅

9期 吉田 洋次郎

201*年8月下旬、アフリカ南部の岩石砂漠と呼ばれている荒野がほんの数週間だけ野生の花で覆われる“神々の花園”を見るために私と妻は旅に出た。

1. 何もない、本当に何もない

途中数か国を経由してナミビアの首都ウイントフークに夜遅く着いた。空港からホテルまでの道はほとんど暗闇だったが、見上げるとまばゆいばかりの満点の星空だった。翌日から陸路南アフリカのナマクワランド国立公園を目指して数千キロ南下する。

翌朝ウイントフークを出発、国道B1を進みそしてC24号の舗装されていない道をがたがた揺られて夕方にセスリウム近郊のロッジに到着した。夕食後、南十字星を見つけしっかりと目に焼き付けた。

翌日まだ星が瞬く中ロッジを出発、ナミブ・ナウクルフト国立公園が開園するのをゲートの前でしばらく待ち入場した。7時15分過ぎにナウクルフト山地の上から赤くて大きな太陽が昇り、砂丘が一瞬朱色に染まり砂漠の一日が始まった。

途中見たフェアリーサークルに驚き、デューン45の近くで朝食をとった。車で入れる砂漠の最深部にあるソッサスブレイから徒歩で通称ビッグママと呼ばれている砂丘に登る。頂上では視界に入るのは碧い空とアプリコット色の砂丘とわずかな木々の緑だけである。360度人の手による物が全く見当たらない大パノラマを楽しんだ。

ナミブとは現地の言葉で“何もない”という意味だそうだが、本当に何もない世界だった。



(ナミブ砂漠)

名残を惜しみながら急な斜面を駆け足で下っていたら、尻もちをついたのでそのまま滑って下りた。再び国道B1に戻ってひたすら南下し、ケートマンズホープの郊外にあるコカプーンの森で沈みゆく夕日をのんびりと眺めた。コカプーンはアロエユリ科の植物で成長が遅く、大きな木は100年以上経っているそうだ。



(コカプーンの森)

翌日アメリカのグランドキャニオンに次いで世界第2の峡谷フィッシュリバー渓谷を訪れたがその雄大さに圧倒された。



(フィッシュリバー渓谷)

更に国道B1を南下して、国境の町ノルドヴヴァにてナミビアとはお別れし、最終目的地の南アフリカに入国した。ナマクワランド国立公園の観光の拠点となるスプリングボックに到着したのは、日本を出て8日目の夕方であった。

2. 神々の花園に咲く花

ナマクワランド国立公園は、南アフリカの北西部にあって南北800km、東西300kmで日本の本州の半分ほどの面積がある。その多くが岩と砂でできた岩石砂漠の公園であるが、8月に雨が降ると中旬から9月上旬にかけてデイジーやガザニア、松葉ボタンなど4,000種類もの花が咲き、辺り一面オレンジ色の絨毯を敷き詰めたお花畑となる。

最初に、スプリングボック東方にあるゴージャップ自然保護区を訪れたが、デイジーがまばらに咲いているだけでお花畑のイメージとはかけ離れた景色だった。スプリングボックの南西方向にあるスキルパット自然保護区では花が咲いているようだとの情報を得て、数時間かけて移動した。そこではデイジーやガザニアなどのワイルドフラワーが咲きオレンジ色の絨毯となっていた。



(ナマクワランドに咲く花の絨毯)

なだらかな丘陵を、花々を眺めながらの散策と写真撮影、昼食を満喫し再びスプリングボックに戻った。

次の日は冷たい風が吹いてアフリカとは思えない肌寒さのなかバーリンドープの町にある多肉植物園を訪れた。多肉植物は2,000種以上あり、そのうち850種がナマクワランド地方に存在するといわれている。どれも厚い葉肉に貯水組織を持ち、触るとブヨブヨしていた。

石を置いたようなストーンプラント、現地住民の漢方薬フディア、ガンに効くことがわかって注目的となっているキャンサーブッシュ、ユーフォルビアなどが勢揃いしていた。



(ユーフォルビア)

途中大西洋に面したランバーツベイに立ち寄り、カツオ鳥のコロニーを見学した。数千羽ひよっとしたらそれ以上が群れを成してラッシュアワー状態だった。

ケープタウンでは近郊のカーステンボッシュ植物園を訪れた。南アフリカの国花で花の王様と称えられるプロテアが色鮮やかな原色で辺りを圧倒するような大輪の花を咲かせていた。またエリカの花も見ごろだった。



(カーステンボッシュ植物園の花)

そしてマンデラ元大統領が捕らえられていたロベン島の監獄やボルダー海岸に棲息するペンギン、アフリカ大陸のほぼ最南端の喜望峰を見学して私たちの旅は終わった。

アフリカ南部の大自然に触れた15日間は、私の人生の中でも大きな比重を占める旅であった。



(ボルダー海岸のペンギン)



(喜望峰にて)